

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

当号は7・8月の合併号です

8月のゼミは休講とします

コロナ感染者は、全国で6月下旬から激増し、10万人/日突破し、オミクロン株の新系統 BA・5 を主役とする第7波に突入しました。政府も「全国旅行支援」の見送りを決めました。8月ゼミは大事をとって休講とします。

尚、ゼミは10月外部講師講演を除き、順延とします。

伊勢神宮の創建

—9月3日ゼミ紹介文:増田 修作会員記—

I.伊勢神宮のご神体「八咫鏡」と神宮正殿の研究

昭和40年福岡県糸島の平原古墳から多数の鏡の破片が出土し、その中に直径46cm、鏡の文様が八葉座という他に例を見ない大型内行花文鏡が含まれていた。古墳発掘の責任者であった原田大六氏は、伊勢神宮に伝わる皇大神宮儀式帳、御鎮座伝記などの記述との一致から、平原古墳から発掘された内行花文鏡は伊勢神宮のご神体「八咫鏡」の同範鏡であり、従って「八咫鏡」を守護神として東征した神武天皇の神話は実在する神話で、その年代は平原古墳の築造された200年頃と結論付けた。またご神体「八咫鏡」を納める御船代は木棺、御船代を安置する伊勢神宮正殿は殯の宮に酷似していることを指摘し、創建当初の伊勢神宮が崇り神「八咫鏡」の封鎖の霊廟であったことを暗示した。

II.伊勢神宮の創建を伝える文献資料

伊勢神宮の創始について、記紀、伊勢神宮諸雑事記などの神宮関連文書は一様に、垂仁天皇二十五年丙辰、三月、天照大神が自ら託宣して五十鈴川上(現在の内宮)に鎮座されたと記し、これを伊勢神宮の創始とする。また「八咫鏡」の祭祀に功績のあった度会氏の文書からは、創建以降の伊勢神宮の歴史を読み取ることができる。

III.伊勢神宮の創建と発展のプロセス

平原古墳からの「八咫鏡」の同範鏡の出土は、これまでの定説とは異なる新しい伊勢神宮の創建と発展のプ

ロセスを推定させることとなった。

①平原古墳から出土した大型内行花文鏡は伊勢神宮のご神体「八咫鏡」の同範鏡であり、神武東征に同行し、後に大和朝廷の神宝として祀られた。

②しかし崇神天皇の時、天皇は「八咫鏡」と同床することに不安を覚え、崇り神として宮中から退下。鎮めの地を求めて各地を巡行し、伊勢・五十鈴河上宮に鎮座。これが後の伊勢神宮の創始につながることとなる。史書の記す通り垂仁丙申年(356年)。

③しかしこの後およそ320年間、「八咫鏡」は大和朝廷にとって“忘れられた神”であった。大和朝廷が伊勢に鎮座した「八咫鏡」を厚く祀った形跡はない。

④壬申の乱に勝利して即位した天武天皇は、皇祖・神武の象徴であるにもかかわらず“忘れられた神”であった「八咫鏡」を、“天皇王権の尊貴性を主張するため”皇祖神として復権することに着目し、伊勢神宮を、皇祖神を祀る神社として位置づけ、天武二年(673年)内宮創建。祭神は皇大神宮儀式帳によれば「天照坐皇大神 所備天照意保比流賣尊」。

⑤アマテラスオオヒルメ(天照大日靈)は巫女の意味で、当時の人々にとって伊勢神宮の祭神アマテラスはオオヒルメすなわち「八咫鏡」を鎮め祀る巫女であって、皇祖神、国家神というようなイメージではない。それが持統天皇から文武天皇への前例のない譲位継承のため、タカミムスヒからアマテラスへの皇祖神の交代という政治的選択とともに天照大神と称され、神宮の主祭神への道を歩み始めたのではないかと。

⑥天平に入って伊勢神宮は「大神宮」と尊称される別格の神社となった。

IV.資料

①「八咫鏡」を奉斎する御樋代と御船代

②平原弥生古墳発掘図

③御鎮座伝記、皇大神宮儀式帳、延喜式 以上

女王の国々と狗奴国とはについて考える

—9月3日ゼミ紹介文:槌田 鉄男会員記—

これまでの2回のゼミでヤマト王権発祥の地、奈良県桜井市の纏向遺跡は騎馬民族の扶余とその支配者であった公孫氏によって作られ、邪馬台国を中心とした女王の国々(倭国)は熊本中部以北の弥生渡来人の国であり狗奴国は熊本中部以南の縄文色の強い国だったと言うことを述べてきた。今回この女王の国々と狗奴国についてどのような国々だったのかももう少し掘り下げて考えてみたい。

238年の朝貢で卑弥呼が得た称号は倭国王でも邪馬台国の王でもなく『倭王』である。女王の国々を考える上で倭王・卑弥呼とは何かを最初に考えてみた。その中で女王国とは邪馬台国とはほぼ同じ意味で使われているので今回は卑弥呼を共立した30余りの国々のことをあえて「女王の国々」と呼ぶことにする。卑弥呼が朝貢した後、倭国と言う国名が出てくるが『倭国乱れ相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王と為す』とあるので倭国と今回の女王の国々は同じ意味になる。ここにある『倭国乱れ』が後漢書で言う『倭国大乱』であり、自説では女王の国々に対する扶余の攻撃である。前回のゼミで示した女王の国々は2018年12月から翌年にかけて開かれた国立科学博物館の企画展『砂丘に眠る弥生人』で示された渡来系弥生人の範囲とはほぼ一致する。これで近畿か九州かの論争はほぼ決着したと考えている。

女王の国々は4つのゾーンに分けられ魏志倭人伝では原則として北から南に書かれている。1つ目は里程と戸数が示された伊都国や奴国など7国、次に筑紫平野の邪馬台国周辺、3番目は名前のみが列記された熊本北部の21国、そして宮崎の投馬国の4つでありゾーン外として熊本南部の狗奴国となる。

ゾーン1; 里程と戸数で示された7国

7国の中で狗邪韓国は朝鮮半島南端の金海市付近、対馬国は対馬島、そして一大国を壱岐島とすることに異論を挟む人は多くはないだろう。そして末盧国は唐津、伊都国を糸島、奴国を春日市の須玖岡本遺跡とするのが一般的かと思われる。しかし、末盧国、伊都国、奴国の比定地をこのようにすると魏志倭人伝に記載された距離や方角とかなり異なってくる。

魏志倭人伝では狗邪韓国～対馬国、対馬国～一大国、一大国～末盧国は全て千余里で等間隔になっている。しかし比定地間の距離、金海市～対馬、対馬～壱岐間はほぼ同じだが、壱岐～唐津間はかなり短い。そして末盧国から伊都国は東南とあるが唐津から糸島は東北東だ。さらに末盧国～伊都国間は500里、伊都国～

奴国間は100里で5倍であるのに対し唐津～糸島間は糸島～須玖岡本遺跡間の2倍ほどしかない。元々、唐津とするのは末盧国がこの地方を包括する地名・松浦に似ており、伊都国は糸島に発音が似ているからであって語呂合わせに過ぎない。比定地の見直しが必要だ。

そうすると末盧国は福岡市(博多)、伊都国は大宰府近傍、そして奴国は筑紫野市周辺とすることで距離や方向がほぼ魏志倭人伝通りになる。

福岡市の西新町遺跡からは多くの大陸系の遺物が出ており国際貿易港として弥生時代から大陸への窓口だった。近くには後の鴻臚館跡地もあり外国の要人を迎えるのに最も相応しい場所と言える。魏の使節はここに上陸後、伊都国のあった現在の太宰府の地に向かいそこに留め置かれたのだと思う。太宰府は西新町遺跡から東南方向になり短里で測ると約500里になる。

伊都国は『郡使の往来に常に駐まる所なり』と外交施設があったことや『一大率を置きて、諸国を檢察し、諸国之を畏れ憚る。常に伊都国に治し、国中に於いて刺史の如き有り』と書かれ監察機能を持っており後の太宰府と同じ役割を担っていた。そうすると場所的にも機能的にも太宰府が一番伊都国に相応しいことになる。現在の太宰府近傍には大きな弥生遺跡はないが、伊都国は千余戸とされ大国ではない。太宰府は邪馬台国時代からずっと太宰府だったと言うことになる。位置的に言って邪馬台国のあった筑紫平野に入るための関所のような存在だったのではないだろうか。

戸数2万余戸の奴国に比定した筑紫野市には隈・西小田遺跡と言う福岡県最大の埋葬施設を持つ弥生遺跡があり不弥国はその周辺の小集落だろう。

ゾーン2; 筑紫平野の邪馬台国

筑紫平野には吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡など大規模な弥生遺跡がいくつもあり戸数7万戸とされる邪馬台国に相応しい地域と言える。その中で卑弥呼がいたのは久留米市近傍だったと思う。この周辺にはいくつもの弥生拠点集落があり卑弥呼の墓の有力候補・祇園山古墳がある。近くには筑後一之宮の高良大社があり、その周囲は3kmに渡って神籠石に囲まれ、この神籠石は7世紀のものと言われているが大溝から弥生式土器が出ている。卑弥呼がここを拠点に扶余と攻防をしていたのではないかと想像を巡らしている。

ゾーン3; 熊本北部から阿蘇地域の21国

菊池川沿いの方保田東原遺跡や熊本市を流れる白川沿いから阿蘇にかけては多くの弥生遺跡があり名前

のみが列記された21国に相応しいと思う。この地域では多数の鉄器類が出ているが、特に阿蘇地域は住居跡から多くの工具類が出ており鉄器が一般化していた。弥生時代の日本で鉄器が一番普及していた場所とも言える。21国の中で3つの国に『蘇』の字が使われており、これらが阿蘇にあった国ではないだろうか。海から遠く離れた阿蘇地域に高度な鉄器文化が発達したことは大きな謎だが肥後一之宮が菊地や熊本平野ではなく阿蘇神社であることも頷かれる。阿蘇神社は6年前の熊本地震で大きく損壊した。一刻も速い復旧を願うのみである。この21国に比定した地域からはビールのジョッキ型をした独特な形状の土器が出ている。

ゾーン4;宮崎にあった投馬国

水行20日の投馬国は宮崎の西都原辺りが一番相応しいと思う。この辺りには妻の地名が多く中国語の『トゥーマ』に発音が似ている。更に律令時代には当磨(とうま)と言う駅もあったと言う。また川床遺跡からは多量の鉄器が出ている。宮崎は九州で最も前方後円墳の多い所で、ヤマト王権はこの地を制するのに多くの犠牲を払ったのではないかと想像する。

別ゾーン;熊本南部にあった狗奴国

熊本県の中央を流れる緑川のすぐ南に宮地遺跡と言う大規模な弥生遺跡があるが、土偶など縄文色の強い遺物も出ている。ここより南には大規模な弥生遺跡はなく鉄器類も少なく人吉盆地を中心に熊本南部では縄文的要素が強い弧帯文様を施した免田式土器が多数出ている。この土器が多く出土する範囲が狗奴国と考える。狗奴国と女王の国々との対立は「縄文人対弥生渡来人の対立」と考えている。

日本全体を意味する5世紀以降の倭国に相当するのは魏志倭人伝では『倭』と言える。朝貢前の卑弥呼は単に『女王』としかないが、朝貢後は『倭の女王』または『倭王』となる。従って狗奴国は本来朝貢後の彼女に従わなければならなかったはずだ。

関連動画をYouTubeに10本投稿しています。私の名前で検索し、ご視聴頂ければより理解しやすくなると思います。是非試してみてください。了

(参考文献)

- ・榎田鉄男『九州の邪馬台国vs纏向の騎馬民族』文芸社 2019年
- ・企画展『砂丘に眠る弥生人—山口県土井ガ浜遺跡の半世紀—』国立科学博物館 2018年

- ・第39回くめの考古資料展『筑後川と弥生時代のくめ』久留米市教育委員会 2014年
- ・渡邊義浩『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2012年
- ・菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』彩流社 2010年

ゼミ会場と時間13:15~16:50

1、全水道会館 中会議室(5階)

2、全水道会館(8階建てビル)へのアクセス

- ①JR水道橋東口(お茶の水駅寄り)下車、北方向へ神田川を渡り、徒歩2分。
- ②都営三田線水道橋駅下車A1出口より北方向へ徒歩1分。○電話:03-3816-4196

中世の豪族:菊池氏の拠点発見

—齊藤 潔会員記—

—熊本県菊池市教育委員会発表(下記1~5の出典は文化財発掘出土情報2022年6月号に掲載された4月23日付読売新聞福岡版の記事である。)

- 1、菊池川中流域で、鎌倉~南北朝(13~14世紀)の武士の居館跡や船着場遺構が発見された。この一帯は中世の九州一円に影響力を持った菊池氏初期の拠点である菊之城跡の伝承を裏付ける。水運と交易で力を蓄えた同氏の姿が浮かび上がる。
- 2、菊池氏は肥後北部を領域とする豪族で、平安後期から戦国期の450年間に活躍した。通説では、太宰府権帥の藤原隆家の郎等で、府官の藤原政則マサリの子孫とする。
- 3、院政期は、鳥羽院武者として菊池氏の名前が登場する。源平内乱期には、菊池隆直が肥後の武士団を糾合して、一時は平氏支配に抵抗、「菊池権守」と称して、一国棟梁的存在となった。鎌倉期には肥後における幕府の有力御家人となり、元寇で活躍した。しかし、1333年の護良親王(1308~35年・後醍醐天皇の子)の令旨を受けて倒幕を決意し、幕府の鎮西探題(博多)を襲撃し敗死した。しかし、この功で子の菊池武重が建武政権(1333~36)から肥後守に任ぜられた。以後、菊池氏は南北朝期(1336~92)には南朝方にたち、護良親王の弟の懐良カネヨシ親王(1329~83)を将軍官とする征西将軍府(菊池市隈府)の軍事力の中核となった。そして、1372年に足利幕府の九州探題(博多)の今川了俊に敗れて、征西府は壊滅した。
- 4、しかし、征西府壊滅後も、菊池氏は本領の菊池を中心に勢力を張り、事実上、肥後守護の権限を認められたが、戦国期に豊後の大名の大友氏に滅ぼされた。
- 5、菊池川流域は、国内有数の穀倉地帯で米等の物資

は川で運ばれ、地域に富と財をもたらした。菊之城跡の600m北東には氏神の北宮阿蘇神社があり、近くには上市場や下市場という地名も残る。中世には交易拠点の市があったと考えられる。城跡からは中国産陶器や白磁天目茶碗も出土し、菊池氏が菊池川一有明海を介した国際貿易ルートを持っていたと想像させる。以上が、上記掲載記事の要約である。

ここで、私が注目したのは、菊池氏の肥後における逞しい政治・経済活動である。即ち、菊池氏が武士(兵・ツワモノ)という側面と、荘園経営を維持・拡大した領主・経済人という側面の2点である。この政・経両面の実相を、歴史上典型的に演じたのが菊池氏だったと思う。以下で、上記記事に即して、菊池氏の上層権力との対応を分析して、中世豪族の生き様を想像してみたいと思う。

A、菊池氏は藤原孝家の郎等で、当初は藤原氏を名乗っていたようだ。一方、菊池氏は郡司から大宰府の役人となり、荘園開発に関わったという研究がある。この情報から推定すると、①藤原政則の時代に国司として下向し、その後菊池郡の郡司菊池氏の女婿となった。②又は、国司任期後に土着して菊池郡の荘園開発領主となり、菊池氏を名乗ったかの何れかであろう。

B、荘園は、古代の貴族や寺社による墾田や開発予定地からなる初期荘園(墾田地系荘園)と、中世(院政期戦国初期・11世紀末～16世紀)の経済的基盤である領域型荘園(寄進地系荘園)の2種類ある。菊池氏が活躍したのは中世の領域型荘園の時代である。

C、領域型荘園は、在地の開発領主が貴族や寺社の仲介で、天皇・摂関家へ寄進を行い、自らは荘官となった荘園である。何故、上級権力者に寄進したのか？そのメリットは、政府への租税納入の免除や国司の立入を拒否できたからである(不輸不入権)。何故なら、寄進先が天皇家(上皇・天皇)や摂関家であり、最高権力者だったからである。中世の土地制度は、荘園と公領(国衙領)の2本立てで、面積も国土の6割が荘園だった。最高権力者が、自らの利益を優先して律令制(公領制)を破壊した時代でもある。

C、荘園の領主権(収穫の取り分)は、当初は天皇家(上皇・天皇)・摂関家＝本家、寄進を仲介した貴族・寺社＝領家、そして在地領主を務める荘官の3者がピラミッド的に重層していた。しかし、鎌倉幕府成立後は、公領の官人や荘園の荘官が御家人となった。こうして、本家―領家―荘官の3層の領主権のうち、荘官の地位が向上した。理由は幕府成立で任免権を幕府が掌

握し、本家・領家の支配権が弱まった。更に、承久の乱(1221年)での幕府側の勝利で、幕府の朝廷に対する優位は決定的となり、荘園領主は幕府の御家人になることで権益は守られるので、天皇家や中央貴族への寄進は稀となり、荘園と公領比率が固定化した。

D、菊池氏は肥後の豪族として荘園を開発した。当初は利害得失を鑑みて、天皇家・摂関家に寄進し、その荘園の荘官となったと思う。そして、荘園経営や交易で富を蓄えて軍事力を保有し有力武士になった。

E、院政期には鳥羽院(1129～56)の武者として登場する。鳥羽上皇は白河上皇の孫で、27年間院政を行った。鳥羽院政期には、巨大な天皇家領荘園群が形成され、日本は本格的な荘園制社会に入ったのである。菊池氏は荘園を寄進し、荘官になり、併せて北面の武士として鳥羽院政を支えたのである。

F、源平内乱期(1177～92)には、平氏の支配に抵抗した。菊池氏の城跡から出土した中国製陶磁器から推測すると、日宋貿易独占を図る平氏と利害が対立したのかもしれない。菊池氏はここで、したたかに源氏側につき鎌倉幕府成立後は、有力御家人になった。

G、菊池氏は元寇(1274・1281)で活躍したとある。元寇では九州御家人は、多大な軍事的、経済的負担を強いられた。しかし、恩賞は少なく、逆に北条幕府は九州諸国の守護職の北条一門への集中を行った。菊池氏は守護職と言う命がけの権益が脅かされたのである。

H、菊池氏は後醍醐天皇の倒幕に与し、北条鎌倉幕府を打倒し、取り上げられた守護職の取戻しを計ったと思われる。倒幕後、菊池氏は建武政権から肥後の大名に任じられ、続く南北朝期も南朝政権の九州(征西府:菊池市隈府)における軍事力の中心となった。征西府將軍宮(1361～72)の懐良カネヨシ親王は、1368年に建国の明の洪武帝から、「日本国王」と見なされ、倭寇の禁圧を要請された。懐良親王は倭寇禁圧は拒否したが、外交上は日本国王良懐と称した。菊池氏の真の狙いは、日明貿易だったのではなかろうか。

古代以来の豪族菊池氏は、中世の激動期を荘園の経済的権益を確保し、政治力を駆使して時の権力者の興亡を見極めて、したたかに生きていたのである。尚、本稿では『魏志倭人伝』記載の狗奴国の官・狗古智卑狗クコチヒクとの関連は資料不足で触れない事とした。了。

(参考文献):伊藤俊一『荘園』2021年・中公新書。

:工藤敬一・森茂暁・瀬野精一郎『日本歴史大辞典』。

:ブリタニカ国際大百科事典。